あ 小豆洗いという化け物がいる。

湯船に浸かるとどこからともなくつぶやきの音が聞こえる。
麗の中で心石を磨くような繊り返しが続いた。心配した母は、
たちまち眠気が差し、幾度か揺れかけた。
家中に札を貼る。
いつしか怪異は消え失せたが、灯台を伝う俺の耳はその
震えを覚えていた。

い 一反木綿という化け物がいる。

窓を白いものが過る。見る間に隣の庭へ流され、子供の
悲鳴が上がった。
見れば芝生にシーツが広がり、端から小さな靴を履いた
足が伺える。とんだ枯れ尾花だ。俺は欠伸まじりに台所へ
向かう。
紅茶を手に戻ってみると子供も布も消えていた。

う 海座頭という化け物がいる。

道の向こうから小さな影が近付いていた。
「一曲吟じまする。ご所望、ご所望」
盲い、杖を突いた老人である。
「所望？」
老人は背中の琵琶を下ろし始めた。
断るより速く、音が辺りを震わせる。瞬時に水が押し寄
せ、俺は空気を求めて足掻いた。

え 煙々羅という化け物がいる。

俺は紫煙で輪を拵え、税に入っていた。
煙の重なりに柔らかい影が浮かび上がる。笑っている女
の口元に見えた。
記憶を探る俺を他所に黒電話が鳴り出す。
「なあ知ってたか？」
訃報を伝える友人の言葉は遠く、俺は彼女のえくぼを思
い出していた。

お こそこそ岩という化け物がいる。

拍子木の音が家中まで響いてくる。最近、不審火が絶え
なかった。
「怖い、怖い」
縁側を渡るしな俺は呟きを捉える。
「明日は我が身」
「大事ない。水神様がいらっしゃる」
見回すが、誰の姿もなかった。井戸の傍に石が幾つか転
がっている。

か いまだ人という化け物に会れず。

現世をさまよう

百鬼夜行　十番勝負

(c) 2014 ピーナッ

作画フォント：モッチョポップ
http://www.mopstudio.jp/
作画画像：ピョーンピクトグラム 2.0
http://pictogram2.com/

く 一目入道という化け物がいる。

その男は怪姫に立っていた。片目が眼帯に覆われている。
俺は男の素性を問い質ねた。だが、その度に男は消え
失せる。
再び俺は窓外へ目をやった。男は眼帯に手をかけていた。
外し始める。
目を逸らそうと努めるが体は微動だにしなかった。

け 猫又という化け物がいる。

「お母さんいる？」
庭に相母が佇んでいた。膝の猫が払い、俺は眼鏡へ向か
う。だが、母は俺の話をあまりに聞かず、忙しいと言下に
断じた。
縁側に戻ってみると相母の姿が見えない。
「あの婆さん。今夜が峠だよ」
猫が話したのは、その一度きりだ。

こ 提灯お化けという化け物がいる。

岐阜提灯を咬み取り俺は店のガラス戸へ手をかけた。
しかし、軒に何かが下がっている。
破れた團から白目を剥いた提灯だった。
「おいっ」
留守なのか主人の返事はない。帳場に提灯が置かれ、お
持ちください」と紙が貼られていた。

さ 座敷坊主という化け物がいる。

「遊ぼう」
親戚の子供だろうか。法事に付きまとわされた挙句に子供
の世話とは嫌になる。
「お母さん？」
「居ってる」
仕方なく庭に放ってあったボールを子供と投げ合った。
「まだだよ。もうちょっと」
線香の煙が漂い、子供の姿は薄らいだ。

ゆ 幽霊傘という化け物がいる。

シャッターの下りた店先で俺は煙草を喫んでいた。降り
出した雨は弱まる気配もない。
「痛！」
足元に傘が転がっている。渡りに船と開いた途端、腕が
引かれ、足は浮き上がった。柄を離した俺は地面に尻餅を
着く。
傘は空へと遠ざかっていった。

め 海坊主という化け物がいる。

宇宙は永久に怪異に満ちている。あらゆる科学の書物は百
鬼夜行絵巻物である。それをひもといてその怪異に戦慄す
る気持ちがなくなれば、もう科学は死んでしまうのである。

寺田寅彦著「化け物の進化」より

百鬼夜行　十番勝負

作者　ドーナツ
発行日　2014年8月24日発行
　　2015年2月10日改
連絡先　twitter：@donut_no_ana
tumblr：http://donut-st.tumblr.com/

※楠樹暖様（@kusunokidan）の折本
デザイン、作成図を使用しています。
　http://www.oritoyo.com/

※お化けの絵が上になります

——— 山折り　--------- 谷折り